

日本国外での日本語

——日本人の自国語意識と日本語への影響——

津 田 葵

近年、日本人の海外進出が活発になり、短期間および長期にわたって異国で生活する人々が増加している。この研究では、1)日本人がいったん日本を離れ、新しい文化、新しい言語に接する時、自国語に対して、どのような意識をもち、2)新しい言語との接触によって日本語はどのように変化するかを考察したものである。

この研究の動機となったものは、筆者の1976年8月から1981年3月までのアメリカでの生活である。異国でのさまざまな場でのさまざまな人々との出会いを通じて、日本を外からながめるチャンスが多く、いつのまにか上記のような研究テーマを追求してみたいと思うようになった。

この種の研究の方法論としては、対象となる人々の言語生活の実態を筆者がじかに考察してみることが理想的である。しかしながら、学位論文を執筆する合い間をみつけてのフィールドワークは、ワシントン D.C. を中心にした地域に限定されていたので、この度の研究では、今までこのテーマに関連してなされてきた研究を整理し分析してまとめるというやり方をとることにした。いずれ、時間的に都合がつけば、その枠を広げてやってみたい。

この分野で研究してきた人々として鈴木孝夫、野元菊雄、比嘉正範氏らがあげられる。鈴木氏は、トルコ、カナダ、アメリカでの体験をもとに、異国で生活している日本人は、日本語に対して積極的な態度がみられず、自国語をどうしても維持したいという信念を持っていないと述べ、私達日本人は、いったん国を離れたら、日本語を捨ててしまう傾向がつよいと結論づけている。同様に、野元氏も、英国、ブラジル、ハワイにおける日本人の言語能力を調査した上で、鈴木氏と同じような結論を下している。また、比嘉氏によって、ハワイ、ブラジルにわたった一世、二世、三世に対しても同じような研究がなされてきた。氏は、結論として、「一世、二世、三世だけを見ると、ハワイの日本語が消滅するのは時間の問題だろう」と述べている。これらの研究から一貫して言えることは、海外の日本人の自国語に対する消極的な態度と自国語に対する確固とした信念の欠如である。

次に、第2の点、日本語が他の言語とある一定期間接触することによってどのような影響を受け、変化するかという点をみえる。紙面の関係上くわしいことは割愛せざるを得ないが、要約し

てみると次のようになる。

- ① まず、語彙、文法、スピーチパターン、用法、イントネーションなどすべての面において変化がみられる。
- ② 敬意表現の使用がみられない。
- ③ 代名詞使用のバリエーションがみられない。
- ④ よびかけ語も単純化される。
- ⑤ 男性、女性それぞれに固有なスピーチパターンがなくなる傾向がみられる。